

異国でがん克服 インド人男性 胆のうを手術 帰国へ 名大病院

【愛知県】名古屋大医学部付属病院(名古屋市昭和区鶴舞町)で胆のうがんの手術を受けたインド人の男性が二十八日、無事に同病院を退院した。執刀した主治医の二村雄次教授は「予想以上に順調に回復した」と、異国で重病を克服した患者を前に声を弾ませた。

男性は、インド中部のボパール市でバス車体メーカーを営むムケシュ・ゴプラニさん(44)。地元の病院で胆のうがんと診断されたが、現地では技術的に切除手術が難しかった。

二村教授は一九九七年にインド西部の都市ボンベイで開かれたがんに関する国際学会に出席。その時の縁で、現地の医師からムケシュさんの手術について相談を受けたという。

「本人の病状について事前にレントゲン写真などをインターネットで入手して手術が可能か検討した」と二村教授。日本での手術が決まり、ムケシュさんは六月末に来日した。がんの影響で肝臓内に大量のうみがたまり、非常に危険な状態だったという。先月二十七日に、胆のうと肝臓の右側半分を切り取る手術を無事に終えた。

異国の地で、約二カ月間の闘病生活。一緒に来日した母のサティさん(62)が病院の近くのアパートに住み、食事の世話などを続けた。手術費や入院費は合計約五百万円に上ったが、「お金の問題じゃありません」とサティさん。

ムケシュさんは「体調はとても良い。年内には仕事に復帰したい」と笑顔をみせた。九月一日に、妻と子どもの待つインドへ帰国する予定という。